

青島 保(あおしま・たもつ)

1、プロフィール

本名、成田堅護。弘前市で古本屋を開業するなど業種を転々とする。個人詩誌「詩ノート」、また同人詩誌「かるでら」を発行し、詩作に励んだ。

<生没>

1929(昭和4)年4月25日～1980(昭和55)年2月17日

<代表作>

詩集『無言鳥』『青島保遺稿詩集』

<青森との関わり>

中津軽郡清水村に生まれる。以後弘前市に在住。工業学校在学中から詩作を試みた。

2、作家解説

弘前工業学校在学中から詩作を試みたが、昭和23年(19歳)に卒業してから、弘前市で古本屋「ありのまま」を開業。それ以後、土木、新聞販売などの業種を転々とした。29年(25歳)に結婚。38年(34歳)に個人詩誌「詩ノート」を創刊、43年までの間に8号まで発行した。この43年(39歳)に十和田市に移住し、地方経済新聞社に入社した。翌年には、風見透らと詩誌「かるでら」を創刊し、昭和51年までの間に9号まで発行した。前後するが、45年に週刊タブロイド版「みちのく新報」を創刊し、主幹となった。46年には、みちのく民俗資料館を建設し、館長となっている。53年に脳内出血で倒れ、55年(51歳)に他界した。

詩集は41年に津軽書房から『無言鳥』が発行されている。さらに57年には、風見透を代表とする青島保遺稿詩集刊行委員会が、『青島保遺稿詩集』を発行している。「編纂を終えて」の中で、風見透は次のように青島保について記している。「……去る者日々に疎しが常であるが、彼の場合は日が経つにつれ、いとおしみの情がいちだんと深いものになっていく。…青島保という、あの強烈な個性と彼の生涯の業とも言うべき詩魂が、いまなお鮮烈に私たちの心奥の襞に焼きついているからであろう。……肩ひじ張った例のつつ張りのポーズとは裏腹に、たとえようもなく弱々しく、常に魂を搔きむしり、傷つき、人間の哀しさに慟哭し続けた詩人、青島保——。」

3、資料紹介

○『無言鳥』

図書

1966(昭和41)年10月20日発行

190 mm × 140 mm

陸奥新報、東奥日報、また個人詩誌「詩ノート」に掲載した作品をほぼ年代順に編んだもの。作者自身が編んだ唯一の詩集。